

〈ビジネスシステム〉

会計情報を活用する能力を育てる教科指導の工夫

— 科目「財務会計Ⅱ」における学習教材の作成を通して —

沖縄県立浦添商業高等学校教諭 木 村 紀 子

I テーマ設定の理由

平成21年 3 月の高等学校学習指導要領の改訂に伴い、本校総合ビジネス科では教育課程を、より高度な専門的知識及び技術の習得が目指せるよう、平成25年度入学生より改編を行った。

総合ビジネス科では「（１）商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術（会計活用能力、マーケティング能力、情報活用能力）を習得させる（２）ビジネスパーソンに必要な心構えや理念を身につけさせる（３）地域社会の経済発展に寄与する能力と態度を育てる」（浦添商業高等学校 学校要覧 平成26年度）を目標にしている。これらの目標達成に向け、1 学年では商業における基礎・基本となる科目、ビジネス基礎（2 単位）・簿記（4 単位）・情報処理（2 単位）を履修し、2 学年からは3 つの科目選択群に分かれ、それぞれのクラスの特色に応じた専門科目の学習に取り組めるよう配慮している。科目選択群の、会計分野の学習を主とするクラスを「会計ビジネスクラス」とし、同クラスの現教育課程（平成24 年度入学生）では、2 学年で科目「会計」を学習している。この科目「会計」の目標を達成するには、会社法や企業会計原則制度、財務諸表作成やその活用等、ビジネスの諸活動に活用できる能力の習得が必要とされており、3 学年でも同科目を学習し、技術の習得に取り組んでいる。

会計ビジネスクラスでは、2、3 学年で科目「会計」を学習することで、生徒の習熟が高まり、3 学年になると、さらに進んだ学習を望む生徒の要望があった。今回の高等学校学習指導要領の改訂では、これまでの科目「会計」と科目「会計実務」が「財務会計Ⅰ」と「財務会計Ⅱ」と名称変更が行われた。それに伴い、本校総合ビジネス科会計ビジネスクラスのエデュケーションにおいて、次年度から、3 学年（平成25年度入学生）で「財務会計Ⅱ（6 単位）」が選択科目として履修できるようになった。

科目「財務会計Ⅱ」の学習は「キャッシュ・フロー計算書」「財務諸表の活用」「監査と職業会計人」などが含まれている。科目の目標は、高等学校学習指導要領解説商業編（以下解説商業編とする）で「財務会計に関する知識と技術を習得させ、会計責任を果たすことの重要性について理解させるとともに、会計情報を提供し、活用する能力と態度を育てる。」としており「学習指導要領改訂前の「会計実務」の内容を再構成したもの」である。学習内容は「日本商工会議所主催 簿記検定 1 級」（公認会計士や税理士など会計系国家試験の登竜門といわれ、大学レベルの知識を求められる）程度の知識や技術の学習が含まれる専門性の高い科目となっている。

会計分野の学習は、企業の会計処理の流れに沿って行われている。しかし、会計処理を行い、財務諸表を作成することが、学習の最終目的になってしまうことが多く、作成された財務諸表を会計情報として活用できる能力を育むための授業がされていない状況であった。

本研究では、財務会計の知識・技術を基盤とした、会計情報を活用する能力を育てるためには、学習教材の作成及び教科指導の工夫が必要だと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

科目「財務会計Ⅱ」において、学習教材を作成し、教科指導を工夫することにより、会計情報を活用する能力を育てることができるであろう。

II 研究内容

1 実態調査

(1) 目的及び方法

生徒の実態を把握し研究仮説を検証するための基礎資料とする。

アンケート調査の実施

(2) 対象及び実施時期

沖縄県立浦添商業高等学校 総合ビジネス科 3 年 会計ビジネスコース39名

平成26年 5 月26日実施（回答数36）

(3) アンケート結果及び考察

高等学校学習指導要領第 3 節商業第 1 款目標には「商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、（中略）経済社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。」とあ

り、商業の各分野で習得した知識や技術を基盤とし、資格取得や競技会への挑戦、ビジネス場面を想定した指導をすることを目標として挙げている。

そこで科目「財務会計Ⅱ」の実施にあたり生徒の会計分野の学習において意欲、興味・関心を測るため、アンケート調査を行った。

その結果「今後、簿記検定試験において上級検定または資格に挑戦したいと思いますか」という質問に対し、上級に挑戦したいという回答が33名、回答数の92%を占めた（図1）。生徒の上級検定に挑戦したい理由は表1に示した通りである。

さらに「上級検定に挑戦したい」と回答した生徒を対象に調査した「取得したい簿記検定試験（または会計系国家資格）は何ですか。2つ選択してください」という問いにおいては、日商簿記検定2級及び1級、または税理士試験に挑戦したいという回答もあり、生徒の上級に対する学習意欲、興味・関心の高さを確認することができた（図2）。

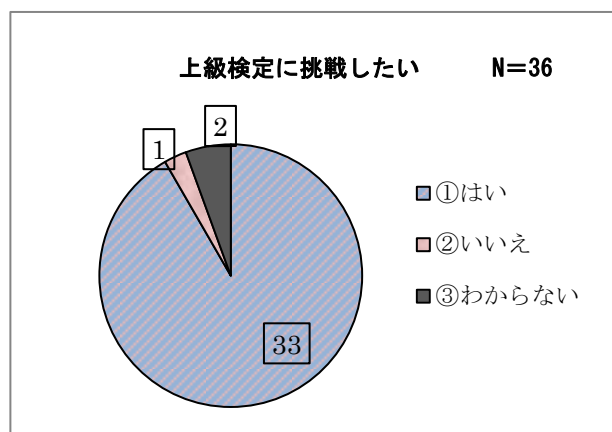


図1 事前アンケート①

表1 事前アンケート②

上級検定に挑戦したい理由	
・	せっかく商業高校にきたので、全商ではちょっと・・・ものたりないので、日商をとって卒業したいと思う。
・	将来、社会的にも簿記は必要とされていて持っていて損は無いと思うから。就職にも有利だと思う。
・	どうせ勉強するのなら、なるべく上を目指したいから。
・	やっぱり上級をもっていた方が就職に役立つ。
・	就職の時、有利。簿記、経理系の仕事に就きたい。

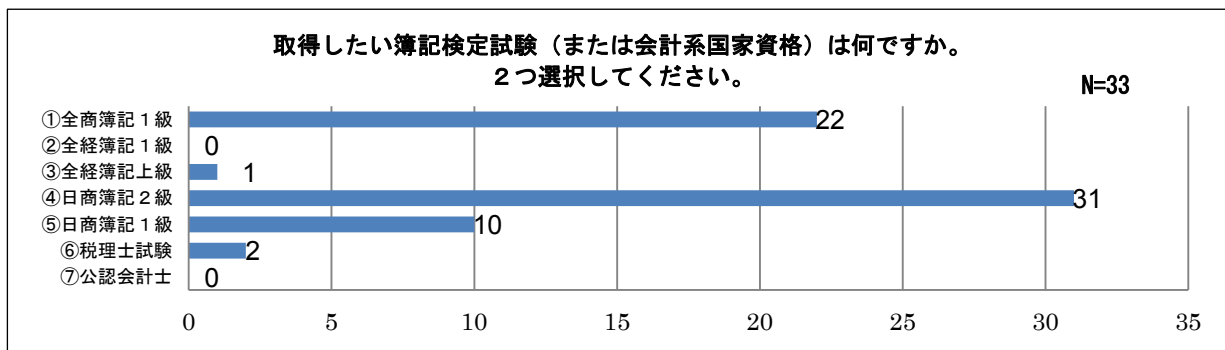


図2 事前アンケート③

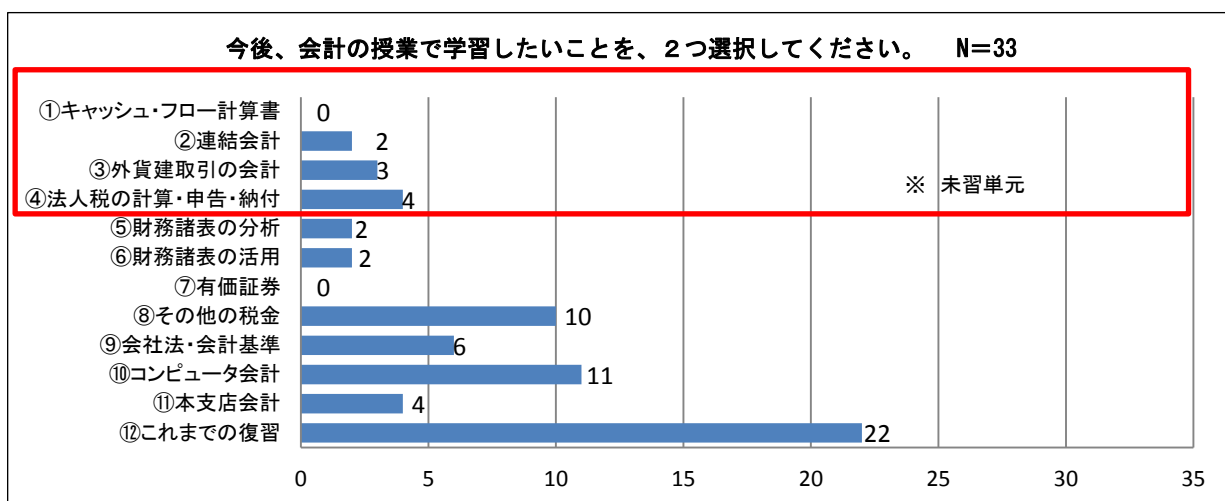


図3 事前アンケート④

これにより、生徒自身が、将来の職業を意識した学習への取り組みに意欲があり、スキルアップを望んでいることがわかった。

しかし、上級検定合格への意欲の高さに反し「今後、会計の授業で学習したいことを、2つ選択してください。」という質問には「①キャッシュ・フロー計算書」や「②連結会計」など未習単元に対する学習意欲は低く、既習単元への意欲が高いことがわかった。特に「⑫これまでの復習」という回答数が圧倒的に多く、理由としては「忘れている」「わからない」など、学習したが習得に至っていない状態であると考え（図3）。

以上のアンケート結果から、上級資格取得および検定試験合格への意欲があり、会計分野の学習が社会で必要とされている技術であることは理解しているが、未習単元への学習については、学習意欲が低い。これにより、既に学習した知識・技術が定着していないため、未習単元への取組を躊躇させているのではないかと考察した。

2 会計情報を活用する能力について

科目「財務会計Ⅱ」における「活用する能力」は「(前略)会計情報を利害関係者に提供する能力と態度及び提供された会計情報をビジネスの諸活動に活用する能力と態度を育てることにある。」(解説商業編)としている。

会計情報とは、企業の財政状態や経営成績等を貨幣単位で表示した財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書等）から得られる財務情報のことである。会計は、目的別に2つに分類される。企業外部の利害関係者に対して提供する目的として扱われる会計を「財務会計」、経営者や部門責任者といった企業内部の利害関係者に経営管理に役立てる目的として取り扱われる場合は「管理会計」という。ただし、両者の内容は「企業会計原則第1一般原則7単一性の原則（前略）異なる形式の財務諸表を作成する必要がある場合、それらの内容は、信頼しうる会計記録に基づいて作成されたものであって、政策の考慮のために事実の真実な表示をゆがめてはならない。」により同一の内容でなければならない。

本研究においては、会計情報を企業外部の利害関係者に対し、提供する「財務会計」を活用する能力の育成を目標に、教材研究および指導の工夫に取り組んだ。

3 年間指導計画書の作成

本研究の対象科目である「財務会計Ⅱ」は、平成27年度から本校総合ビジネス科3年会計ビジネスクラスで履修を予定している。科目の目標として「会計情報をビジネスの諸活動に活用する能力と態度を育てる」を身に付けたい力として計画した。

表2「財務会計Ⅱ」年間指導計画書

科目名	単位数	対象学年	全日・定時	全員履修・選択	対象学科
財務会計Ⅱ	6	3	全日	選択	総合ビジネス科

使用教科書：『財務会計Ⅱ』 実教出版

1 身に付けたい目標等

身に付けたい力	会計情報をビジネスの諸活動に活用する能力と態度
学習の到達目標	①財務会計に関する知識と技術を習得させる ②会計責任を果たす重要性について理解させる ③会計情報を利害関係者に提供する能力を習得させる
目指す生徒像	①自主的に取り組む実践力のある生徒 ②勤労意欲旺盛で責任感のある生徒 ③誠実で思いやりのある生徒

2 学習計画および評価方法等

(1) 評価規準

関心・意欲・態度	・ 財務会計に興味を持ち、積極的に知識と技術の習得を目指すとともに、会計情報から必要な情報を収集し、活用しようとする態度
思考・判断・表現	・ 会計処理の根拠となる国際会計基準への国際的統合の動きや我が国の財務会計の基本概念などについて、考えることができる ・ 財務諸表から、会計事実について判断し、専門用語を使い、伝えることができる。
技能	・ ビジネスの諸活動を計数的に把握し、会社法や企業会計原則に則った会計処理を行うことができる ・ 利害関係者に対し、必要な財務諸表の提供や、財務諸表から得られる会計情報など会計事実を分析し、報告することができる
知識・理解	・ 財務会計の新しい会計基準やその処理に関する知識を習得し、財務会計の基本概念や税効果、監査について理解している。

(2) 学習の計画

月	学習内容	時間	月	学習内容	時間
4	第1章 財務会計の基本概念 1. 財務報告の目的 2. 財務諸表の構成要素 3. 財務諸表の構成要素の認識と測定	15	10	第10章 キャッシュ・フロー計算書 1. キャッシュ・フロー計算書の意義と必要性 2. キャッシュ・フロー計算書の表示区分 3. キャッシュ・フロー計算書の表示方法 4. キャッシュ・フロー計算書の作成手続 5. 直接法によるキャッシュ・フロー計算書の作成例 6. 間接法によるキャッシュ・フロー計算書の作成例	15
5	第2章 資産負債アプローチと収益費用アプローチ 1. 資産負債アプローチと収益費用アプローチの意味 2. 資産負債アプローチと収益費用アプローチと利益計算	12			
	3章 会計基準の国際統合 1. 我が国の会計基準 2. 会計基準の国際統合 3. 我が国の会計基準の特徴と国際会計基準への対応	8	11	第11章 企業系都合会計 1. 企業結合会計の意味 2. 合併会計	17
6	第4章 資産会計 1. 資産の評価規準 2. 資産の評価方法 3. 減損の会計処理	12		第12章 連結財務諸表の作成(その1) 1. 支配の獲得 2. 持分の変動 3. 支配獲得までの段階取得 4. 支配獲得後の追加取得 5. 子会社株式の一部売却 6. 連結財務諸表の作成	16
	第5章 負債会計 1. 負債の意味と評価 2. 社債の期末評価と償還 3. 退職給付引当金	8	12	第13章 連結財務諸表の作成(その2) 1. 持分法の意義 2. 持分法の会計処理	18
	第6章 純資産会計 1. 純資産の意味と分類 2. 新株予約権 3. 分配可能額の計算 4. 株主資本等変動計算書の作成	8	1	第14章 財務諸表の活用 1. 企業グループの現状把握 2. 株価の判断材料 3. 企業価値の評価	18
7	第7章 リース会計 1. リース取引の意味と分類 2. ファイナンス・リース取引の会計処理 3. オペレーティング・リース取引の会計処理	8	2	第15章 監査と職業会計人 1. 二つの法律と監査の仕組み 2. 財務諸表監査の目的とリスク・アプローチ 3. 監査のプロセスと監査手続 4. 監査意見と監査報告書 5. 監査の品質管理 6. 職業会計人の社会的役割と倫理	18
	第8章 税効果会計 1. 利益と課税所得 2. 税効果会計の意味 3. 一時差異と繰延税金資産	10			
9	第9章 外貨換算会計 1. 外貨建取引の意義 2. 為替換算と為替差損益 3. 外貨建取引の基本的な会計処理 4. 外貨建項目の決算時の会計処理	24			
合 計					210

4 既存教材研究

既存の教科書等にて、教材研究を行った。2006年に「会社法」が公布され、会計分野の学習も、勘定科目の変更や会計処理等に改正があり、新基準に対応する公布以降の書籍に限定して行った。

5 学習教材の開発

(1) 提示用教材の作成

これまでの会計分野の教材は、主に教科書と教科書に準拠した問題集を使用してきた。授業は主に、本時の学習内容の説明、要点の整理、練習問題への取組、練習問題の解答、という流れで行われている。

限られた授業時間の中で振り返りの時間がほとんど確保できず、毎時間の授業で生徒が理解しているかどうか、確認が不十分であった。生徒自身も、本時の目標が達成できているか把握できないまま、授業が終了してしまうことがたびたびあり、授業の進行に不安を感じていた。

また、これまでの授業の流れを考えると、練習問題を解く技術が優先になり、会計分野の学習が社会や企業でどのように生かされているか、考えさせる時間的余裕がなかった。

そこで、会計分野の知識・技術を、活用できる能力を育成するために、どのように授業を行うかを考え、提示用教材を作成した。説明や要点の整理（板書事項等）、会計処理手順などをプレゼンテーションソフトで作成し、活用することで、教師の活動にかかる時間を短縮し、生徒の学習活動を充実させることをねらいとした。

表3 提示用教材の特徴

①	生徒の視線をスクリーンに集中させることができる
②	アニメーションによって、会計処理による数値の変化や帳簿への記帳の流れなどを視覚的に訴え把握させることができる
③	スライドと合わせたワークシートを作成することで、帳簿や財務諸表の作成など、板書事項を写す際の時間の短縮ができる
④	操作が簡単で誰でも使用することができる
⑤	何度でも繰り返しスライドを表示できるため、黒板のスペースを気にせず、生徒が理解していない箇所の振り返りがしやすい

(2) ワークシートの作成

ワークシートの冒頭に本時の目標（図4）を表示し、授業開始時に読み合わせることで、目標を意識させることと、生徒の本時の目標に対する達成度・理解度を生徒本人と教師が把握できるように、自己評価の項目を作成した（図6・7）。

また、提示用教材とあわせ、板書項目をワークシートへ直接記入できるようにし、板書からノートへ記帳する時間の短縮ができることや、学習の要点、専門用語を記載し、復習が繰り返し確認できるように心がけた（図4・5）。

Today's goal 評価規準【知識・理解】

- ☛ キャッシュ・フロー計算書は何のために作成される財務諸表かを理解しよう
- ☛ キャッシュ・フロー計算書がなぜ必要か理解しよう
- ☛ キャッシュ・フロー計算書の活動の区分を理解しよう

1 キャッシュ・フロー計算書とは

本時の目標確認

2 板書の必要性

(1) 損益計算書の作成の原則

収 益・・・() 主義 費 用・・・()

損益計算書には、キャッシュの動きがない。だから、

板書事項 1

板書事項 2

図4 ワークシート①

(1) () によるキャッシュ・フローとは、会社の本業である活動による資金の動き	
損益計算書の営業費用の項目が主な表示になる	要点の整理
分析上のポイント・・・経営が順調な会社であれば、営業活動によるキャッシュ・フ	
(2) () によるキャッシュ・フローとは、会社の将来を考えた諸活動による資金の動き	
貸借対照表上の固定資産の項目による増減が主な表示になる	
分析上のポイント・・・「投資」なので、収入と支出では支出の場合が多い。だけど、会社の規模やその他	
収支のバランスを考えないと、将来のための出資でも、現在の経営がうまくいかな	
くなるので注意する	
(3) () によるキャッシュ・フローとは、企業の資金調達による資金の動き	
株式発行、借入れ、社債発行や償還など資金繰りに関係する項目が主な表示になる	

図5 ワークシート②

★今日の授業の目標達成度★				
学習活動	自己評価	A 十分達成	B おおむね達成	C 努力が必要
キャッシュ・フロー計算書とは 【知識・理解①】	本時の目標達成度 (自己評価1)	キャッシュ・フロー計算書が財務諸表であること、企業の資金の動きを表示していることを理解している。	キャッシュ・フロー計算書が財務諸表であることを理解し、企業の資金の動きを表示していることを理解している。	キャッシュ・フロー計算書とは何か理解できなかった。
キャッシュ・フロー計算書の必要性について 【知識・理解②】		損益計算書に表示される費用および収益の表示原則を理解し、利益や損失の金額と、現金有り高（キャッシュ・フロー残高が等しくない理由がわかる。	損益計算書に表示された当期純利益や当期純損失の金額とキャッシュの残高が等しくないことを理解し、黒字倒産をしないように、安全性を確認する諸表であることがわかる。	キャッシュ・フロー計算書が、なぜ、必要か分らない。
キャッシュ・フロー計算書の区分 【思考・判断・表現】		3つの表示区分がわかる。それぞれの違いについて、考えることが	3つの表示区分がわかる。収入と支出のポイントがわかる。	3つの表示区分は分かるが、どのような表示か分らない。

図6 ワークシート③

☆今日の授業の振り返り☆ Aそう思う Bまあまあ思う Cあまり思わない D思わない					
※CDを選択した場合は備考へ理由をお願いします。授業改善に努力しますので!!					
授業への取り組み	本時の振り返り (自己評価2)	B	C	D	備考
理解しようと努力した					
授業が楽しかった					
ノートやワークシートを活用した					
キャッシュ・フロー計算書に魅力を感じる					

図7 ワークシート④

6 教科指導の工夫

(1) 情報機器の活用

プレゼンテーションソフトで作成したスライドを表示し授業を行う。ワークシートの記入や問題の解答状況など、机間指導とあわせて生徒が授業へ取り組む様子を観察しながら、授業を進行することができる。

スライドが用意されていることにより、授業の振り返りに柔軟に対応できる。

(2) ワークシートの活用

作成したスライドにあわせ、授業を進められるように作成。単元の説明や問題の解説等、情報機器の使用と併行し理解を深めながら、ワークシートへ記入ができるようにした。

あらかじめ、ワークシートに財務諸表やその他の帳簿形式を用意しておくことで、解答にかかる時間短縮を図る。

(3) グループディスカッション

情報機器やワークシートの活用によって、深めた知識・技術からどのような会計情報を収集できるか、グループワークを行う。

4人から6人程度のグループに分かれ、グループで財務諸表から会計情報を収集し、ディスカッションによって、財務分析を行う。少人数で話し合うことにより、意見を出しやすくなることや、複数の考えから、より多くの情報を読み取ることが期待できる。

(4) ポスターセッション

各グループで財務諸表から収集した会計情報から、企業の財務状況や経営方針等について、まとめ、ポスターセッションを行う。「財務会計」を行うことを意識させ、専門用語による言語活動の充実と財務諸表を活用できる能力の定着を図る。

Ⅲ 指導の実際

1 検証授業

(1) 第10章 キャッシュ・フロー計算書（12～13時間目/15時間中）

(2) 指導目標

- ① 基礎的な形式のキャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表の財務分析を行うことができる。
- ② キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表の分析結果を報告（プレゼンテーション）することができる。

(3) 本時の評価規準

【評価の観点】 評価規準	学習活動に則した評価規準			評価方法
	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 支援の具体的方法	
グループに分かれキャッシュ・フロー計算書について基本的な理論を考え、キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表の分析について討議を行う 【思考・判断・表現】	キャッシュ・フロー計算書の各区分の会計情報を理解し、キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表から現在の企業の状態を把握、未来を予測した話し合いができる	キャッシュ・フロー計算書の各区分の会計情報を理解し、キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表から現在の企業の状態を理解した話し合いができる	キャッシュ・フロー計算書の各区分が示す会計情報を振り返らせる。基本的な分析方法と照らし合わせて、企業の状態を理解させる	・ 討議の様子 ・ ワークシート
グループ内でまとめたキャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表の分析報告をポスターセッションで行う 【思考・判断・表現】 (プレゼンター)	キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表の分析報告において、財務諸表（キャッシュ・フロー計算書を含む）から全体的な企業状態および将来予測がまとめられたプレゼンテーションになっている	キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表の分析報告において、与えられた会計情報から現在の状態をまとめたプレゼンテーションになっている	キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表の分析報告に必要な会計情報を抜き出させ、会計情報の増減について、考えさせる。気付きを促し、アプローチをかけ、プレゼンテーションのサポートをする	・ ポスター ・ ワークシート ・ 観察 (プレゼンテーション・質疑応答)

【評価の観点】 評価規準	学習活動に則した評価規準			評価方法
	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 支援の具体的方法	
プレゼンテーションを聞き、質問を行う。 【思考・判断・表現】 (インタビュアー)	プレゼンテーションを聞き、キャッシュ・フロー計算書を含む財務諸表から読み取れる会計事実や財務分析について質疑することができる	プレゼンテーションを聞き、グループで話し合ったことと異なる分析に疑問を持ち、質疑することができる	これまでの授業で学習した練習問題で、収集した会計情報を確認させ、質問を考えさせる	・ワークシート ・観察 (質疑応答)

(4) 準備する教材・教具

討議用記録用紙、どこでもシート（ポスター）、付箋紙、振り返りシート（ワークシート）、水性マーカー、ノートパソコン、プロジェクター、スクリーン

(5) 本時の展開

過程	学習活動	教師の活動	評価規準・評価方法
導入 5分	1 あいさつ 出席確認 2 前時の確認 本時の目標をワークシートで確認する	1 あいさつ 出席確認 2 前回の授業でキャッシュ・フロー計算書の分析を行ったことを確認し、本時は、各グループで発表してもらうことを告げる	・身だしなみの確認
展開 ① 5分	3 グループに展開する 6名×4グループ 5名×3グループ ・作業時間を確認し、作業を開始する ①グループに分かれ、ポスター作成に必要な場所を確保する ②代表はポスター作成に必要な道具を受け取る	3 教材の配布 討議用記録用紙、付箋紙、どこでもシート、財務諸表、水性マーカー ・これまでの学習で使用したスライド（分析のポイント、会計情報の読み取りなど）を表示し、グループのディスカッションの材料になるようにする	・1グループごとに封筒で用意しておく
展開 ② 40分	4 発表の準備を行う（40分） ・ 前時から引き続き、グループで財務分析を行う（※1グループディスカッション、※2ポスター作成） *分析ポイントおよびプレゼンポイントはワークシートで確認する ・ 話し合った内容をポスターに記録、まとめを行い、ポスターセッションの準備をする ①どこでもシートに発表用のポスターを作成する ②水性マーカーや付箋紙を使って表示の工夫をする ✓ これまでのワークシートを確認し会計情報の収集ポイントに付箋紙を貼り、グループで企業の状態の把握を心がける ✓ 全員で意見を出し合う ✓ 誰でもプレゼンテーションできるように、発表したい会計情報および分析結果を記録用紙に記入しておく ③プレゼンテーションの準備・練習をする ✓ プレゼンテーションの方法やインタビュアーとしての態度などをワークシートで確認し、各グループで練習を行う ✓ お互いの役割を確認し、仕事の負担が偏らないように考える	4 制限時間を設け、時間内に話し合いポスターを完成するように告げる ・ 机間指導を行い、グループ全員で討議に参加しているか観察する 参加していない生徒がいるグループへのアプローチをする 近くへ寄る、座席を移動する 質問をする ○話し合いの様子をメモし、講評時の素材収集をする グループの良い点を探す ○積極的に話し合っているか ○一人の力に頼っていないか ○グループの役割分担は適当か ○キャッシュ・フロー計算書とその他の財務諸表との関連性を話し合っているか ○企業の状況（資産・負債・現金及び現金同等物の動き）について話し合っているか ○企業の将来（利益計画、販売計画、経営戦略）について話し合っているか ※各グループの良い点は、全体で共有できるように情報を提供する。 ・ 残り時間を表示し、ポスターの作成を観察する	【思考・判断・表現】 ・討議の様子 ・ワークシート ・観察

過程	学習活動	教師の活動	評価規準・評価方法
展開③ 45分	5 ポスターセッションで分析結果を発表する（※3ポスターセッション） ・6名グループは3：3 ・5名グループは2：3 プレゼンターとインタビュアーに分かれる。後半は役を交代する プレゼンテーション時間は質疑応答を含め5分 （前半6分×3、後半6分×3） 6 講評を聞く ・講評を聞きメモをとる	5 ポスターセッションの役割を確認 ・始めと終了の合図 ・ポスターセッションの様子を観察 (1) プレゼンターの財務分析の結果を確認する ① 利害関係者が必要な情報の提供になっているか ② 企業の今年度の状況を報告しているか ③ 企業の将来予測を立て、報告しているか (2) インタビュアーの様子を観察 ① プレゼンテーションから得られる情報をメモしているか ② プレゼンテーションから、自社との違いを理解しているか ③ 質問事項は適切か 6 講評を行う 分析活動、発表準備、発表の様子を振り返る ① 講評の要点を板書し、視覚化する	【思考・判断・表現】 ・発表 ・ポスター ・ワークシート ・記録
まとめ 5分	7 本時のまとめ ・ワーク（振り返り）シートの記入 8 次時の予告	8 本日、分析・発表した内容を、まとめる作業を行い、報告書類を作成する	【知識・理解】 ・ワークシート ・観察

(6) 指導のポイント

① グループディスカッション

5～6名のグループで、財務3表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書）から会計情報を収集し、企業の現在の財務状況と、来年度の目標について討議した（写真1）。

グループで会計情報を収集することで、多くの情報を収集することができた。「財務分析」を行った際も、活発にお互いの意見を出し合い多角的な分析を行うことができた。

② ポスター作成

グループディスカッションにより、分析した会計情報を「どこでもシート」に記入し、ポスターセッションで使用するポスターを作成した（写真2）。

ポスターにどのように表示し、プレゼンテーションを行えば、相手に内容（利害関係者が必要とする会計情報）が伝わりやすいかを考えながら作成していた。



写真1 グループディスカッションの様子



写真2 ポスター作成の様子

また、プレゼンテーションに備え、台本を用意し、練習を行うなどグループで工夫する様子を確認することができた。

③ ポスターセッション

前半3分×3回、後半3分×3回でセッションを行い、すべてのグループにプレゼンテーション及びインタビューをさせた。全員がプレゼンター及びインタビュアーの役割分担を前・後半で交替し、グループ内で個人の役割に偏りが生じないように配慮した。ポスターセッションを行ったことにより、グループで収集できなかった会計情報や分析結果を他のグループのプレゼンテーションやインタビューから発見させることができた（写真3）。

プレゼンターは、繰り返し説明することで、グループでまとめた結果を具体的にプレゼンテーションできるようになり、インタビュアーの質問に対応できるようになった。インタビュアーになった生徒は、各グループのプレゼンテーションから、新しい会計情報を入手したことにより、多角的な視点から財務諸表を分析することができるようになった。徐々に「経営方針」に対する質問が増えるなど、お互いに、専門用語を使用し、活発に質疑応答する様子があった。



写真3 ポスターセッションの様子

IV 仮説の検証

財務会計における知識と技術を習得し、会計情報をビジネスの諸活動に活用する能力と態度を育てるために、本校総合ビジネス科3年1組39名に対し、科目「財務会計Ⅱ」単元「第10章キャッシュ・フロー計算書」の授業を行った。

1 学習教材による財務会計の知識・技術の習得

(1) 提示用教材

会計分野の学習は主に、教科書と問題集を使用し、知識を深め技術を習得する授業の流れによることが多いが、提示用教材を活用したことで、複雑な計算過程や財務諸表に表示する名称（表示項目及び勘定科目）など、アニメーションによる視覚効果で理解を促すことや、板書にかかる時間を短縮でき、本時のまとめにかかる時間を確保できた。また黒板の容量に影響されずに本時の振り返りを十分に行うことができた。

生徒の事後アンケートから「キャッシュ・フロー計算書に記入される数値がどのように記入されているかがわかった」「スライドで数字が計算されていく過程が分かりやすかった」「いつもと違う会計の授業で楽しかった」「勉強するポイントがわかりやすい」など、特にキャッシュ・フロー計算書の作成において、会計処理の流れを確認することができたという意見が多くあり、提示用教材の有効性を確認できた。

(2) ワークシート

提示用教材と合わせて作成したことで、机間指導により、生徒のより近くで観察を行うことができた。生徒の理解を確認しながら、授業を進めることができた。ワークシートを回収することで、教師が生徒一人ひとりの理解度を確認することができ、次時の授業計画に生かせることができた。

授業の最後に「今日の授業の目標達成度（自己評価1）」と「今日の授業の振り返り（自己評価2）」で本時を振り返らせたことで、生徒自身が目標の達成度を確認することができた。

2 教科指導の工夫による会計情報活用力の習得

(1) グループディスカッション

対象生徒39名を7グループに分け、グループに会社名を付けさせる。自社の財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書、その他資料）から財務分析を行うグループワークを実施した。

財務諸表から「会計情報の収集」「自社の現在の状況」「自社の将来計画」に必要な会計事実を収集し、分析するディスカッションを行った。各グループで話し合い、多角的な視点による会計情

報の収集（表4）、企業状況の把握（表5）、経営計画（表6）を立てる様子を確認することができた。

事後アンケートから、「財務諸表について考えることができ、理解につながった」「知識を深めることができた」「グループで話し合っただけで変化を読み取っていくうちにだんだんと理解できるようになりました」との回答があった。座学による知識の習得に加え、グループワークにより、意見の交換を行うことで、財務諸表が示す数値が企業の実態を知る重要な情報になる実感を得たようである。財務諸表分析は、会計分野の活用力を習得するだけではなく、知識の習得及び理解を深める上でも、有効な手立てであったと考える。

表4 会計事実の収集(ワークシートより)

- ・商品回転率の上昇(12.5回→13.7回)
- ・買掛金と支払手形が増加(商品の仕入れ過多)
- ・売上原価率の減少
- ・短期借入金の減少(返済計画)
- ・自己資本と他人資本の増加
- ・純利益率4.0%→5.5%に上昇
- ・株の新規発行による「資本金」増加

表5 自社の現在の状況(ワークシートより)

- ・現金が前期末より増えてキャッシュは動かしやすくなったけど返済するものが多い。
- ・売上事態は下がっているが、売上原価率は下がり、商品回転率も上がっている、仕入計画は大丈夫。
- ・営業活動によるキャッシュ・フローも黒字(¥733,800)
- ・利益があり、キャッシュ・フロー計算書も黒字、長期借入金も増加していることから、経営は順調。

表6 自社の将来計画(ワークシートより)

- ・売上を伸ばすために→新商品の計画→商品開発
- ・マーケティング部の充実
- ・在庫の販売計画
- ・今年度の土地の購入→新店舗の計画
- ・売掛金の回収→取引先の検討を
- ・負債の返済計画を立てる
- ・仕入れ量が多いので、どの年齢層に売れそうか、販売計画が必要

(2) ポスターセッション

各グループのポスターの記載事項が、利害関係者に必要な情報(必要な会計事実、今年度の経営状況、企業の将来予測など)になっているか、ポスターから確認した(表7)。また、インタビュアーが、プレゼンテーションの内容を理解し、自社との違いや新たな財務分析の視点を発見しているか、どのような質問を行ったかなど、インタビュー用ワークシートによる生徒の記録から確認した(表8)。

また、事後アンケートから、グループで話し合い、考えたことをプレゼンテーションすることで、さらに生徒自身の理解を深めることができたと思う(表9)。全員がプレゼンターおよびインタビュアーになることで、プレゼンターは、プレゼンテーションと質疑への対応、インタビュアーはプレゼンテーションの内容をまとめ、質問するなど、それぞれの立場で、考えをまとめるきっかけになり、言語活動の充実と会計分野の知識・技術を活用する力の向上が図れたと考察する。

表7 財務諸表の分析報告(ポスターより)

(株) ど～しよ?? N01	(株) ど～しよ?? N02	(株) ど～しよ?? N03
社長 氏名 社員 氏名	現在の考えられる状況	将来計画
会計期間 H25.4.1～H26.3.31	*売上原価5%減少を実現さらに商品回転率も上がりました。	*取得した有形固定資産を活用
読み取った会計事実	*売上は680,000減少したが上記の努力により、利益は22,000の減少におさえることができました。	新店舗建築
*売上原価の減少65%→60%	*経営状況は悪くない!	*仕入れすぎて余った商品は、マーケティング部を充実させて、今後商品計画をあらためます。
*有形固定資産の取得	(一部省略)	
*株式の発行		
*商品回転率増加12.5回→13.7回		
(一部省略)		

表8 インタビュー用ワークシート（生徒の記録）

会 社 名	(株) 宮城物産
プ レ ゼ ン 者 の 氏 名	
記 録	
(プレゼンの内容) 資本金が増加している 前年¥3,000,000→今年¥3,600,000 ¥600,000の増加→株式発行による増加 売上の低下(¥5,000,000→¥4,320,000) 商品回転率 12.5回→13.7回(1.2回UP) 売上自体は前期より減っているが、売上原価率が5%下がったので、利益が上がっていることがわかる。しかし、商品が余っていることから、仕入れた商品が多かったと考える。	(自社との分析の違い) 自社は資本金のことには、何もふれていないが、宮城物産は、資本金の事も発表していました。 売上と、売上原価率も、きちんと計算されていた。

表9 事後アンケート（生徒感想）

・自分たちで見つけた分析情報以外に、皆がたくさん見つけていて、インタビュアーとして話を聞いていてとても勉強になった。 ・同じ資料で分析しても、グループが違えば、違う見方・考え方があったので、聞きながら楽しかった ・予想もしていなかった質問をされた時に、いかに相手を納得させて、それ以上、質問させないように答えを言うかを考えるのが楽しかった。 ・相手を納得させる説明を考えるのが、難しかったけど、とてもタメになった。
--

3 その他

(1) 自己評価の変容

ワークシートより「今日の授業の振り返り」（自己評価2）、質問「財務分析に興味がある」と「財務諸表を活用することができる」を11月17日（知識・理解）、11月18日（技能）、11月20日（思考・判断・表現）それぞれ集計した（表10、11）。

「財務分析に興味がある」では「Aそう思う」「Bまあまあ思う」の合計が、11月17日では31名（34名中）、11月18日33名（33名中）、11月20日29名（29名中）であった。この結果から、回答したほぼ全員の生徒が、財務分析に興味を持ち、授業に参加していたことがわかった（表10）。11月17日に「Cあまり思わない」と3名の生徒が回答していたが、11月20日の自己評価では「Aそう思う」へ1名、「Bまあまあ思う」へ2名と、興味を持って取り組んでいるという意識の変化を確認することができた。

次に、質問「財務諸表を活用することができる」では、11月17日「Aそう思う」「Bまあまあ思う」の合計が22名、11月18日では26名、11月20日で27名が、財務諸表を活用できるという自己評価をしている。授業が進むにつれて、自己評価が上昇し、会計分野の学習を活用する能力が身に付いてきたと考えられる（表11）。

(2) 事前・事後テスト

11月17日（月）検証授業前と12月2日（火）検証授業後において、財務諸表から会計情報をどれだけ、収集できるかテストを行った。生徒の会計分野に対する習熟度に差があるため、全国商業高等学校協会主催簿記実務検定の合格級別に収集した会計情報数を集計した（表12）。なお、1級は「会計」と「原価計算」の両方に合格し1級となる。

表10 自己評価①

財務分析に興味がある					
	Aそう思う	Bまあまあ思う	Cあまり思わない	D思わない	計
11月17日	6	25	3	0	34
11月18日	6	27	0	0	33
11月20日	11	18	0	0	29

表11 自己評価②

財務諸表を活用することができる					
	Aそう思う	Bまあまあ思う	Cあまり思わない	D思わない	計
11月17日	1	21	7	5	34
11月18日	3	23	4	3	33
11月20日	8	19	2	0	29

今回、検証授業で行った学習内容は、全国商業高等学校協会主催簿記実務検定会計の出題範囲である「経営分析」（キャッシュ・フロー計算書を除く）の進んだ学習となっている。検証授業前の1級合格者12名及び会計合格者1名による分析数の平均は3.0であったが、検証授業後は、平均分析数は5.0に上昇し、財務諸表に表示された数値を、会計情報として活用する力の向上があったと考えられる。また、1級及び会計合格者に限らず、読み取った会計情報数は全体で検証授業前の平均2.0から検証授業後は平均3.7になり、全体的に財務諸表から会計情報を収集した数の増加が確認でき、会計情報の活用力は向上したと考察する。

表 12 集計結果

合格級別会計情報収集数比較一覧表 N=28					
合格級	人数	検証前	検証後	増減数	
		平均収集数	平均収集数		
1 級	12	3.2	5.3	2.1	
会 計	1	1.0	1.0	0	
原 価 計 算	4	3.3	5.2	1.9	
2 級	8	1.4	3.5	2.1	
3 級	3	1.0	3.3	2.3	

V 成果と課題

1 成果

- (1) 財務諸表及びその分析に興味・関心を持つ生徒が増加

財務諸表に記載された数値から経営の成果や企業活動の背景を、考えることができるようになった。生徒からは「いつもはただ、貸借対照表や損益計算書を作っているだけだったけど、それが実際にどういうことを表して、経営状況がどんな風になっているのか少し分かることができて、もっと、勉強したくなりました」という声があった。財務諸表の有用性が理解できたことで興味・関心を深めることができたのではないかと考える。

- (2) 会計分野の学習における知識・技術力の向上

財務諸表に記載された金額の取引内容や会計処理の方法等を遡って確認することによって、これまでの会計分野の学習を復習するきっかけになり、知識・技術が向上したと考えられる。

- (3) 財務諸表から得られる会計情報を分析、活用する力が向上

少人数でのグループワークを取り入れたことで、個々の意見を出しやすい環境になり、グループ内でディスカッションが活発に行われ、分析した会計情報をまとめ、ポスターセッションを行うことができた。お互いのプレゼンテーションを聴き、より多角的な財務諸表分析の視点を養うことができた。

- (4) 専門用語を使用した言語活動の充実

グループで財務分析やポスターセッションを行うことで、生徒間の言語活動が活発になり、専門用語を使い、お互いの会計情報を提供することができた。

2 課題

- (1) 会計分野の学習に対し、苦手意識を持つ生徒への指導の工夫

生徒の会計分野における検定合格状況から、習熟度の差が大きい判断できる。特に上級検定試験の学習内容に苦慮している生徒は、苦手意識があり、新しい単元の取組に対する、学習意欲が消極的であると感じる。

高い知識・技術を求められる学習であるが、会計分野の学習がビジネスの場面で活用される身近な学問であることをイメージでき、学習に対し、意欲、興味・関心が持てるように指導の工夫・改善が必要だと感じる。

- (2) 学習教材の改善と充実

キャッシュ・フロー計算書の作成および財務諸表分析における学習教材を作成したが、生徒が授業後の復習など、自主学習で使用するためには、内容の改善と充実を図る必要がある。

- (3) 上場企業の財務諸表作成及び分析に関連する知識・技術の習得

実際に株式上場されている企業の財務諸表には、まだ学習していない内容が含まれている。上場企業の財務諸表作成や財務分析を行える活用力を習得するためには、さらに知識・技術の習得が必要である。

〈参考文献〉

- 大畑伊知郎 2014 『決算書でわかる！いい会社、やばい会社は「ここ」で見抜く！』 ダイヤモンド社
ジョン太郎 2014 『超入門！銀行員がやっている決算書の読み方・使い方』 宝島社
市原淳子（編集） 2014 『新社会人のためのお金の教科書』 主婦の友社
澤田和明 2012 『企業再生コンサルが明かす経営分析実践の手法』 秀和システム
文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説 商業編』 実教出版
文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領』 東山書房
岩佐英彦・宿久 洋 2009 『授業評価・市場調査のための「アンケート」調査・分析ができる本』 秀和システム